
変人学園の日常

水瀬唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変人学園の日常

【ISBNコード】

N2457Y

【作者名】

水瀬唯

【あらすじ】

ここは美城学園。都会にある高校。その学園に通っている冬樹雪斗。今日は新学期。これまで雪斗はあまりパツとした高校生活を送れていなかつたので、最後の年くらい生活が送れればいいなと思っていた。親友の風神もクラスは一緒で、いい生活が送れそうだなと思った。……教室に入るまでは。そこにいたのは個性豊かすぎる生徒たちがいた。毒舌お嬢様、嫌われながらも一途な恋をする熱血男、うるさいバカ、物忘れを通り過ぎた物忘れなど。雪斗ははたしていい学園生活を送れるのか？ 超ドタバタコメディ！

プロローグ（前書き）

初めまして、水瀬です。

超駄作ですが、読んでくれたらうれしいです。

プロローグ

ここは美城学園。どっかつうと都会の方にある高校。その学園に俺、冬樹雪斗ふゆきせつとは通っている。

いつもどおり電車に乗り、いつもどおりに登校する。

今日から俺は高三になる。そう、今日は新学期だ。正直、これまで俺はあまり充実した高校生活を送れていなかつた。だから高校最後のこの年で少しでも充実した生活が送れたらいいなと思っていた。

ちょっとした期待を背負つて門を通り抜けた……

もうすでにクラスは発表されていた。たくさんの人ひとが下駄箱前に集まつっていた。

俺はその人ひとの中にまぎれる。

そして、やつと紙の前にたどり着いた。

「俺は……5組か……」

俺はそれを確認して、人ひとから出た。

「よつ！ 雪斗、おはよー！」

「ああ。おはよう」「ああ。おはよう」

すると突然、聞き覚えのある声が後ろからした。

そいつは数少ない俺の友達、『市川風神』。1、2年ともクラスが一緒でとても仲がいい。

その風神も人ひとにまぎれてクラスを見に行つた。

しばらくして風神が戻ってきた。そして風神が俺にクラスのことについて聞いてきた。

「雪斗は何組だった？」

「5組だよ。風神は？」

「おお～、俺も5組だよ。また一緒に、ようじぐ」

「うん。」ひぢらこそ

風神が一緒にかなり安心した。いにしが一緒に、話し相手がないからな。

そして俺たちは教室に向かった……

プロローグ（後書き）

次話もよろしくお願いします。
感想・評価等もお願いします。

第1話 個性豊か過激なクラスメイト（前書き）

キャラがじゅわじゅわしています。読みづらこと思こます。すこません。

第1話 個性豊か過ぎるクラスメイト

俺らは、教室に向かった。3年生にもなると階は最上階なので正直疲れる。

やつと教室に着くことができた。

扉を開け、教室に入る。

もうすでにたくさんの生徒が集まっていた。

俺は自分の席にかばんを置き、後ろのほうで風神と話した。しばらく話していると、担任らしき人が教室に入ってきた。

「お~い、席に座れ~。早くしないと塩酸ぶっかけるぞ~」

恐ろしいほどみんな早く席についた。もちろん、俺も風神も早く席に着いた。何なんだこの教師（らしき人）は。

「え~、3年5組の担任になつた夏芽美保だ。よろしく~

『いやです！』

全員が声をそろえてそう言つた。もちろん、俺も風神もそう言つた。何なんだこの教師（らしき人）は。

「塩酸ぶっかけるぞ~」

『よろしくお願ひします！』

全員が声をそろえてそう言つた。もちろん、俺も風神もそう言つた。そう、この人は担任だ。

何とか落ち着いたところで、自己紹介タイムが始まった。

「蒼井瑞希です。……つていうか自己紹介って何ですか？ 私、物忘れ激しくて……物忘れって何ですか？」

彼女は蒼井瑞希さん。外見は青髪のきれいなロングヘアで美少

女だ。背もすらっと高くスタイルもよい。

しかし物忘れが激しい……というか物忘れの域を超えていいる気がする。

ん~、僕も頭がよくないから友達になれる気がするな~。

「…………といふことによろしくお願ひします。お願ひしますって何ですか?」

前言撤回。僕以上にバカだ。何を言つても無駄な気がする。

「俺は市川風神。よろしく」

こいつはさつき言つたとおり市川風神。俺の数少ない友達。男なのだが、その姿は正直女の子にしか見えない。今風に言うと男の娘というのだろうか。

紫色の髪の毛でショートヘア。頭もいいし、スポーツも出来る。妬ましいほど弱点がないやつだ。

強いて挙げるなら、女の子扱いをしたらかなり傷つくなうだらうか。

「縁道寺龍希。よろしく」

彼は縁道寺龍希君。なんだか無愛想だけど実はとても優しい……

という噂を耳にしたことがある。

緑色の短髪だ。おそらく眞面目な人なんだろうな~。

「尾崎修吾つ~す！ よろしく~！」

このチャラい男子は尾崎修吾君。とにかくチャラい印象が強いな。茶髪のショートヘアで、外見は結構イケメンなんだが……チャラい。

めがねかけたら「僕チャラメガネ！」とか言いつこうだ。正直、苦手なタイプだ。

「僕は木野山広隆。よろしくね」

「」のいかにも「僕は紳士です」みたいな喋り方の彼は木野山広隆君。

水色の髪の毛でちょっとはねている。

噂で聞いたけど……サッカー部で超弱いとか。

「俺は鶴嶋鍵太。よろしくな、レディたち」

「こいつきらい……じゃなかつた！ こいつは鶴嶋鍵太君。黒髪で少し長めのショートヘア。」

噂で聞いたけど、本気でハーレム作る気だとか……全く、バカな夢だ。

「藤堂裕也です。好きな人は野崎……キャツ言つちやつた！」

「このうつとうしい……じゃなかつた！ このにぎやかな人は藤堂裕也君。」

少し赤みの入った髪ではねている。自己紹介で言つた通り野崎さんLOVE。

無駄な恋心を抱いている人。

「私は野崎秋葉^{のざきあきは}です。よろしくお願ひします。あと藤堂君は死んでください」

彼女は野崎秋葉さん。暗めの茶髪でセミロングにピン止めをしている。

整つた顔立ちだし、噂では成績優秀。性格も穏やかで落ち着いているらしい。

藤堂君のことになるとちよつ毒舌になるのだが……。

「えへ、冬樹雪斗です」

そして俺、冬樹雪斗。

銀髪ではねている。

そして次々と自己紹介していった。まあ、とりあえず個性的だった7人は覚えておこう（風神は省く）

しかし、名簿の最後の人、が来ていない……休みだらうか。

「じゃあラスト、渡島！……お~い渡島は休みか~」

先生が言つた寸前にドアを開ける音がした

「遅れてすいませんでした」

1人に少女が入つてきた。

「お前、渡島か。今ちょうど自己紹介しているところだ。とつととお前もしろこのカス」

「カスって言つたよね！ 今カスって言つたよね！ ってか先生だよね！？」

やはりこの教師はひどかつた……。

「ええ~と。わたじまあいら 渡島愛羅です。よろしく」

遅れてきた少女は渡島愛羅さん。ウエーブがかかったロングヘアで頭のリボンが特徴的。このクラスでもかなり目立つていて透き通つた白い肌の金髪碧眼美少女。

身長は140cmあるかないかぐらい低い。美少女というよりは美幼女というほうが正しいか。覚える人一人追加。

全員の自己紹介が終わり休み時間になつた。

「ああ~。やつと終わつた~。終わつたつて何ですか？」

蒼井さんはいつも大変そうだな~。テストとかどうしているのだろ~う。

「へ~い。終わつたぜ~、ヒュー~」

相変わらずチャラい尾崎君。苦手なタイプだ……。

「ふふふふ~。今年こそはサッカー部レギュラーになるぞ~」

夢を語っている木野山君。実力は知らないけど噂からすると無理だろ~う。

「俺はハーレムを作る！」

分かるとは思つが鶴嶋君。なんともバカな夢だ。一生叶わないだ
らう。

「野崎へ。俺と付き合つてくれへ」

「つっさい！ 消えんこ」の「ミ」

一ひらは藤堂君と野崎さんのやり取り。藤堂君は一途だけど正直
ううとうしい。

野崎さんも野崎さんで毒舌過ぎる氣がする氣がするけど……。

渡島さんはまだ性格がよく分からぬけど……姿勢からするとお
嬢様っぽいのできつと上品な人なんだろ？

縁道寺君は相変わらずクール。だけど真面目っぽい。

そして担任の夏芽先生。何よりも怖い……。

風神だけが頼りのこのクラス、俺はやつていけるのだろ？

第1話 個性豊か過ぎるクラスメイト（後書き）

次話もよろしくお願ひします！

第2話 美少女の素顔（前書き）

第2話です。ぜひ読んでください

第2話 美少女の素顔

あの大波乱の自己紹介から翌日、今日からは普通に授業が始まる。

「お~い。席につけ~。早くしないと塩酸ぶつ掛けるぞ~」
みんな一瞬で席に着いた。やはりこの先生は怖い。

「起立！ 礼！」

『お願いします』

号令をかけ、席に座る。そして先生が連絡事項を話し始めた。
いくつかの連絡事項を聞き、HRはあっさり終わった。

「じゃあ1時間田は学級長や委員会を決めるぞ~ カス共」

『カスつて言つたよね！ 今カスつて言つたよね！』

相変わらずひどい夏芽先生。なぜ教師をクビにならないかは不明だ。
「まずは学級長だ。やりたい奴いるか？」

クラス全体がシンとしているやはりみんなやりたくないのだろう
……まあ俺もだけど。

そのシンとした中で一人立ち上がった。

「僕が学級長になりますよ~！」

立ち上がったのは、ハーレムを作るというバカな夢を持つてゐる鶴嶋健太君だ。

「よ~し。ほかの奴いか~」

「ちょっと先生！ 待つて下さいよ~」

夏芽先生はあつさりスルーした。まあ、当然のことだが……。

「一応聞くが鶴嶋よ。お前は何が目的で学級長になるんだ？」「もちろんハーレ……」

「あみだくじ。よし、あみだくじにじょひ

鶴嶋君の夢、終了。微塵もかわいそうと思わない。

結局、男女共にあみだくじになつた。俺は「ひこう」とおこなつてしまつタイプ何だけどな……。

いや、いくら物語だからといつてそこまでベタな展開無いだらう。ここは真面目そうな縁道寺君にあたつたり……

「あみだくじの結果、冬樹になつた。頑張れよ」
するわけなかつた……うん、冷静に考えてみれば物語だからなるに決まつてるよね。

周りを見ると鶴嶋君悔しがつてゐる。変わつてあげたいよ本当に……。
しかし学級長つて何やればいいか分からいや、まったくやつたことがないし。

まあ、女子に任せればいいか。蒼井さんじゃない限りは大丈夫だろう。

「女子は渡島だな。頑張れよ」

渡島さんか……まあ、大丈夫かな?しつかりしてしてそうだしな。

「じゃあほかの委員会決めるぞ~」

ほかの委員会は適当に決まつた。

「最悪だ~」

今は休み時間なのだが学級長なので荷物を職員室まで運んでいる。
チクショウ……あのクソ夏芽。いつか一発殴つてやりたい……その後死ぬかもしれないけど。

隣では渡島さんが荷物を持ってだるそうに歩いている。

自己紹介のときにも言つたがかなり美少女だ。

金髪のきれいな髪、整つた顔立ちで碧眼、誰もが憧れるよつたな美少女。

きっと性格もよいのだろう……

「ちひ、だるいな」

ん?何か聞き間違いだろ?か。今、渡島さんがすゞく毒舌発言をしたよ?な……

「お前、冬樹だっけ?」

「うん…… そうだけど……」

何か、渡島さんのキャラが違う気がするのだが……。

いやいや、落ち着け! 冬樹雪斗! こんなに美少女な子だぞ! ?

そうだきつと空耳だ空耳! キツと空耳……

「ふん! こんなダメ男と一緒にだなんて最悪!」

空耳じやねえええ。今はつきり聞こえた! ダメ男つて言つた!

間違えない。こいつは性格が悪い、そして毒舌。

「つたく。高校最後のこの年に学級長つて……マジで面倒くさいめちゃくちゃ不機嫌そうな顔でいった。何なのこの子! 性格悪すぎ!」

「あの…… 渡島さん?」

「つむせー! プロローグでは主人公っぽくなつていたのに1話からは個性的なキャラに押されて存在薄くなつてきた影薄男!」

痛いところをついた……悲しくなつてきた……。確かに影薄くなつてきただけど……

高3新しく覚えた個性的な8人の中で縁道寺龍希君、野崎秋葉さんに並んで真面目だと思っていた渡島愛羅さんはとんでもない毒舌少女だった……。

俺は本当に大丈夫なのだろうか……。

第2話 美少女の素顔（後書き）

会話文が多くてすいません……。

次回もお願いします！

第3話 くじの結果、保育園へ（前書き）

第3話です！

またしてもぐだぐだです！ すいません！

第3話 くじの結果、保育園へ

「野崎 LOVIE～！ 結婚してくれ～」

「死ねこの「ミー～」」

「俺はハーレムをつくる～」

「あげぽよ～！」

今日もにぎやかすぎる人たちにまぎれて、俺は風神と話していた。最近は風神以外にもいろんな人と話すようになつたのだが、やっぱり風神と話していると落ち着く。

「学級長大変そうだな。大丈夫か？」

「大丈夫じゃね～よ～。渡島さん、すゞく毒舌だし……」

学級長に選ばれてから1週間たつた。すでにばてている俺。

学級長の仕事自体はそれほど大変ではないのだが、渡島さんの毒舌とクラスのテンションの高さに疲れている。

いろいろ話しているうちに朝休みが終わり、夏芽先生が入ってきた。

「お～い、席につけ～。さもないと塩酸ぶつ掛けるぞ～」

みんな一瞬で席に着いた。もちろん俺も風神も。何これ？ 定番になつてるの？

「ええ～と、もうすぐ仲良し遠足があるぞ～」

『小学生か！』

見事にはもつた全員のツッコミ。遠足つて……マジで小学生だな。「まあ、私たちがするわけじゃない。保育園からお願いがあつてな、交流会みたいな感じだ」

なんだそういうことか。小説ならではの設定だ。

「そこで全員で行くのは多すぎるから10人ほどに絞りつつと思つ。

とつととあみだくじをするぞ」

今回は最初からいきよくあみだくじにする夏芽先生。前の体験から学習したのだろう。

交流会のメンバーって小説的に行くと……俺が覚えた個性的な人と風神と俺だったりするのかな？

まさか。そこまでうまくいかないか……なりたても無いしな。

「あみだくじの結果、男子は冬樹、市川、尾崎、木野山、藤堂、縁道寺、鶴嶋で女子は渡島、蒼井、野崎だ。」

うわ～マジで当たった……。さすが小説、ある意味怖いよ。

それにしてもこのメンバー……風神と縁道寺君と野崎さんは眞面目なのでいいとして、ほかの6人はかなりきつい……。

みんな性格が濃すぎて俺の存在がますます薄くなるじゃないか！

……ていうか消えるんじゃないかな……。

「とにかく、決まったことだ！ 頑張れよ

『嫌です！』

『塩酸ぶつ掛けるぞ』

『頑張ります！』

相変わらず塩酸大好きな夏目先生。何これ？ 定番になつてゐるの？

とこつことで、当日の朝（早つ）

俺たちが行く保育園はひまわり保育園。美城高校よりも少し遠いので、いつもより早起きしていく。

ちなみに現地集合なのでみんなとの待ち合わせももちろんしない。まあ、あいつらと行くのはいろいろと面倒くさいしな……。

うだうだと駅に向かっていたらいきなり高級そうな車が横に止まつた。

「あつ、冬樹じゃない。おはよう

「お……は……よ……う……」

俺を呼んだのは渡島さん。どうやら「」の高級そうな車は渡島さんの家のものらしい。

渡島さんつてもしかして超お嬢様なのかな？まあ外見だけはある

嬢様っぽいからな。似合わないことはない。

「どうせ一緒にとこる行くのだから乗つて行かない？」

「え……いいの？」

「いいよ別に……」

親切に渡島さんが行つてくれたのでお言葉に甘えて乗らしてもらった。

「渡島さんはいつも車で学校までくるの？」

「まあ、歩くの面倒くさいし疲れるしね」

普通の人は面倒くさくても疲れても歩かなくちゃいけないのに…

…ちくしょう羨ましい…

「あと、渡島さんつて呼ぶのやめてくれない？ 私苗字で呼ばれるのが好きじゃないんだよね」

「そうなの？ つてじやあなんて呼べばいいのや」

渡島さんの性格からすると……「愛羅様」とかだろうか。それはいやだな…

「ふつうに愛羅でいいよ」

「えつ」

少し以外だった。てっきりもつと変なのかと思つてた……。お嬢様を呼び捨てで呼んでいいかは分からないうが、本人が望んでいるのならそれでいいか…

「じゃあこれからは愛羅つて呼ぶよ」

「うん、よろしく」

そして俺たちはいろいろ話しながらひまわり保育園に向かつた。

…

第3話 くじの結果、保育園へ（後書き）

次回は、ひまわり保育園に着きます。

第4話 ひまわり保育園にて……（前書き）

前回の続きです！

今回はいつもより会話文が多く、読みづらくなついていますが頑張つて読んでください。

第4話　ひまわり保育園にて……

ひまわり保育園

「ち～す！冬樹と愛羅」

真っ先に挨拶してきたのは尾崎修吾君。朝からチャラい……。

ちなみに、もうきているのは風神、尾崎修吾君、野崎秋葉さん、

縁道寺龍希君、木野山広隆君だ。

残りの3人はまだ来ていない。まあ、大体予想はしていたけど。

「おはよう。冬樹君、愛羅。今日は頑張るうね！」

「こちらは野崎さん。な……なんて優しい人なんだ！　何だかんだ

言つても野崎さんはやつぱりやさこ……

「野崎いいい！　おはよー！」

「消えろ！」み虫！」

「うむ……前言撤回するべきなのだらうか……。いや、言いかえるだけにしておこう。

野崎さんは優しい。藤堂君以外には……

「まあ、気楽に頑張るうぜ冬樹」

縁道寺君は完璧人間だ。めちゃくちゃ優しい。

しばらくして全員そろつたので遠足についての話を保育園の先生に聞いた。

「高校生の皆さん、本日はおこしいただきありがとうございます。
私、園長の田中花子たなかはなこと申します」

「すぐ平凡な名前の園長さん。ありがとうございます……。

「今回はゆり組の遠足です。ゆり組は20人のクラスなので大丈夫だとは思いますが……まあ頑張ってください……はい」

「園長、なんか暗い……ていうか怖い。」

「私がゆり組担任の佐藤明子です。よろしくお願ひします」
なぜこんなに平凡な名前が多いのだろう。田中と佐藤って日本で
多い苗字5位以内には入ってるぞ……まあいいか。

この先生はわりと気さくでいい人だった。そこそこ美人だし。

8時30分頃、子供たちが登校してきた。

「せんせえー！ おはよー！」

「おはよー」とぞいります

可愛い子供たちが登校してきた。幼い子つて可愛いな。

「雪斗は子供好きだつたっけ？」

と、風神が尋ねてきた。

「うん、可愛いしね！」

子供は好きなほうだ。同級生との付き合いでより難しくないしな。

「私は好きかがよく分かりませんね……分からなって何ですか？」

分かると思うが蒼井さん。「分からない」が分からないといわれ
てもす』べく説明しにくい。

朝の会が始まった。俺たちは紹介のためか前に立たされている。
「はい、みなさん。今日は美城高校の皆さんと一緒に遊んでくれま
す！ ジャあみんなでお願いしますを言いましょう。せーの！」

『おねがいします！』
子供たちが元気にいつてくれた。ああ……やつぱ可愛いな
俺たちも自己紹介を終えた……。

遠足場所は結構近い公園だ。俺も小さいころによく遊んだな。
「では、ここからは自由行動です。みんな楽しく遊んでね～」
『は～い』

先生がそういうと一気にこっちに走ってきた。

「雪斗おーちゃん！　みくとあそんで～」

「つべくべりの幼女が寄ってきた、それもめちゃくちゃ可愛い子が。

「うん、いいよ～。おーちゃんと遊ぼつか～」

「こんなに可愛い子と遊ばないバカはいない！　遊ぼうじゃないか！

「ふ……冬樹……」

愛羅が話しかけてきた。なんか顔色が悪いな、大丈夫だろつか……

「どうした？」

「冬樹つて……もしかして口つ口……」

「君は何か勘違いしている！　俺はただの子供好きだよ～！」

心配して損した！　俺は純粋に子供が好きなだけ！　あの「口」

から始まって「ン」で終わる言葉ではない！

「そうだよね！　冬樹があれなわけないよね～」

愛羅が汗だらだらで言つた。まあ、とりあえず誤解は解けたのかな？

「おーーちゃん… ゆきとも遊んで～」

「うん！　遊ぼうー！」

「ふゆきー！　俺たちともあわせーぜー！」　男の子供

「ごめんな。また後で」

「おーーちゃん！　あたしとも遊んでー！」

「うん！　いいよ～」

「うーん。やつぱり子供は可愛いな～。

『……』

子供と仲良く遊んでいるのに、なぜかみんなにじゅーとした田で見られる。何かへんなことをしたのだらうか……

「ーの……」

ようやく愛羅が口を開く。何が言いたいのだらう……

「ーの腐れ口リコンがああああ～！」

大声だった。めちゃくちゃ大声だった。そこ声で腐れ口リコンといわれた……

「ちよつと待つて！　俺はロリコンじやないよー。」

「あきらめる雪斗！　さつきのやり取りを聞いてロリコンと思わない奴がいるか！』

風神にまでいわれた。なんか風神に言われるヒョウックなんだが

「冬樹君。痴つて……ロリコンだつたんだね」

「木野山君は黙れ！」

「そうだ！　縁道寺君なら……」

「縁道寺君！　俺はロリコンじやないよー。」

「……」

「なんか言つて！　お願ひだからなんか言つてええええー。
『あやあやあしてこるつけで遠足は幕を閉じた……』

帰り道

「冬樹はロリコン～」

「ロリコンじやないよ！　あと変な歌作るなー。」

愛羅が勝手に歌まで作った。つたぐどいつもいつも……

結局、楽しかったのだけど……ほかの人たちにひどい誤解をされてしまつた日であった……

第4話 ひまわり保育園にて……（後書き）

ありがとうございました！

次回もよろしくお願いします！

第5話 待ち合せ中……（前書き）

今回もよろしくお願ひします！

第5話 待ち合せ中……

「お~い。冬樹~」
ある昼休み、俺はクラスで一番チャラい尾崎修吾君に話しかけられた。

「どうしたの?」

「今度、愛羅の家に遊びに行くんだけどお前も行こ~ぜ!」
なぜ俺に話しかけたのかは分からないが、まあいいか。
それにしてても愛羅の家か~。金持ちだしどんな家か気になるな~。
「でも愛羅は大丈夫なのか?」

「大丈夫! もう許可はもらってるし!」

許可もらつているのか……それなら行かせてもらおうかな。

「うん、じゃあ行かせてもらひよ!」

「イエ~イ! ジゃあ日曜日、美城公園8:30に集合な!」
といつて尾崎君はスキップをしながら去つていった。

その日の放課後。

「雪斗! 一緒に帰ろうぜ!」

話しかけてきたのは可愛い顔をした男、市川風神。紫のショートヘアでそこらへんの女子より断然可愛い。

俺も風神も帰宅部なのだが俺は学級長の仕事、風神は委員会の仕事でいつもより帰りが遅くなつた。

新学期のときは風神が少し遅れると言つたからまたま一緒にじゃなかつたけど、普段は一緒に登下校をしている。

「うん! とつとと帰ろうぜ」

俺たちは話しながら校門を出た。

「やういえば雪斗って今度の日曜日って愛羅の家行くのか?」

「うん行くよ。何で知ってるの?」

「いや、俺も尾崎に誘われたから雪斗ももしかしたらと思つてな」
「いつたい尾崎君は何人誘つているのだろう。クラスみんなってことは無いと思うけど……」

「愛羅つて超お嬢様だからどんな家かちょっと楽しみなんだよな」「確かに俺も結構楽しみにしている。お嬢様だから豪邸に住んでいるのだろう。

……といろいろしている内に風神の家に着いた。ちなみにここから少し行つた場所が俺の家。

「じゃあな雪斗、また明日」

「うん、バイバイ」

俺は風神と別れ、自分の家に向かつた。

あつという間に日曜日

俺は、少し早く公園に着いてしまつた。まだ風神、尾崎君が来ていない。

しばらく公園の時計台のところで待つていた。すると見覚えのあるクラスメイトが目に入った。

「あれ？ 冬樹君じやない。どうしたのこんな所で？」

たまたまあつたのは野崎秋葉さん。少し暗めの茶色のセミロングヘアとピン止めが特徴の美少女。

今日の野崎さんの服装は緑色チェックのスカートに白いカーディガンという組み合わせ。制服も似合つているが私服もかなり似合つている。なんとも野崎さんらしい私服だ。

「野崎さんこそどうしたの？ 俺は愛羅の家に行くからここで風神と尾崎君を待つていたんだけど……」

「えつ！？ 冬樹君も愛羅の家へ？ 私も尾崎君に呼ばれてここで来たんだけど……」

「マジで尾崎君は何人誘つたのだろう……ん？ までよ……野崎さん

が来るつてことは……

「野崎～！ おはよ～！」

やつぱり来た。藤堂裕也君が……とにかく野崎さんLOVEな熱血男。少し赤みの入った髪ではねている。顔自体は悪くないのだけど性格がとても残念。

「朝からうるさい！ 死ねごみぐず！」

そして野崎さんの超毒舌発言… 朝から怖い…

「おはようござこます。……おはようござこますつて何ですか？」個性的な性格をしている蒼井瑞希さんまでもが来た。青髪ロングヘアの美少女。今日は長袖の上に水色のキャミソールで下はショートパンツ、黒の一ハイという組み合わせ。蒼井さんはスタイルがいいから何来ても似合ひ。性格は異常だけどね。

「おはよつ雪斗。」

「ち～す！ もう来てたのか！」

風神と尾崎君が来た。さらに…

「おはよ～。今日はいい天気だね」

水色の髪のそこそこかっこいい人木野山広隆君が来た。この人頭大丈夫か、今日は曇っているぞ。

「俺はハーレムを作る！ ……あ、みんなおはよう」

「おはよ～ よりも「俺はハーレムを作る」という言葉が先に出るバカ男、鶴嶋鍵太君。黒髪で少し長めのロングヘア。

「よ～。冬樹おはよ～」

彼は縁道寺龍希君。緑色の髪の毛で短髪、とてもやさしい男の子だ。……つてこのメンバーは保育園に行つたメンバーじゃないか。うすうす気付いてはいたけどまさか本当になるとは…… さすが小説。何でもありだな。

「よ～し。じゃあ愛羅の家に行くぞ～！」

『へ～い』

俺たちは全員愛羅の家に向かった。

……次回、俺の存在は薄くなりそうだ……

第5話 待ち合せ中……（後書き）

次回、愛羅の家に行きます！

特に面白くはありませんが次回もよろしくお願いします！

第6話 冬樹達in渡島家

愛羅の家に着いた。だけどこの家は

『でけえええええええええええええ！』

あまりにも広すぎた。

庭にはプールがあるし、東京ドーム何個分はある。愛羅つてま
じでお嬢様だったんだな……。

「じゃあインターホン押すぜ！」

岸嶋君は何のためらいもなく押しめた。ある意味力物だ。

尾崎君が押してしばらくするとメイドさんらしき人がドアを開けてくれた。

申し訳す

さすがメイドさんだ。礼儀が正しい。
俺の周りは非常識な奴ばかり
だからこういう人をみると感動する。

「愛羅様の部屋に案内しますね。少し遠いですが……」

玄関から自分の部屋が遠い。で家の中はどれだけ広いんだ……まあ、そこは突っ込まないでおこう。

そして俺たちはエレベーターで5階の愛羅の部屋へ向かうた。ちなみにエレベーターや5階というのも突つ込まない方向で。

「歌詩たせし世した。」これが愛羅様の部屋となつます。

やつだった。上の嫁せぬわい……野崎さんとかもいはして

「……」

?

まあ、蒼井さんはいつも通りなので「メントはしないでおい」。
結局、「～って何ですか?」という風になる。

「ふふっ。やつと着いたか。まあ、サッカー部のHースな僕にはこれぐらいの長さどうって事ない……ぜえぜえ」

息切れしているのに調子こじている木野山君。あとサッカー部のエースはかなり無理があるだろ？

「イエーイ！ とつとと入るわぜ～！ あげぼよ～」

チャラい。チャラすぎる。とにかくチャラいしか言いようがない尾崎君。

「愛羅様～。お密様です」

ガチャツ

「いらっしゃい。どうぞ入つて」

愛羅が出てきた。愛羅は薄ピンクのふわっとした感じのHawaiiワンピースに黒タイツというロリータファッション。色白で金髪碧眼な愛羅にはとても似合っていた。性格には合っていないが……

「よつ！ 愛羅の部屋広いな～」

「えつ？ これぐらい普通じゃない？」

愛羅の感覚がわからない……。

愛羅の部屋はピンクがメインとなつた女の子らしい部屋だった。意外と少女趣味なのか？

「ところで何するの？」

野崎さんが問い合わせる。こんな家だから何でもできやうだな……

「おい愛羅！ 家の中に遊園地ないの？」

言つたのは尾崎君。バカかこいつは。家の中に遊園地なんかあるわけがないだろ！

「うーん。ここにはないけど渡島家が経営している遊園地が遠いところにあるよ」

おかしいだろこの家！ 普通遊園地なんかねえよ！

「あとうちは発明が得意な兄がいるからよく発明品を使つよ」「どんな発明品なの？」

「人の中身を入れ替える装置とか、体が3cmになる薬とか……」

もうこれ普通じゃないな……。なんか日常系学園ものからめちゃくちゃ変になってきたな。

結局、人生ゲームやトランプなど案外平凡な遊びになった。

そしていつの間にか時間はすぎて帰る時間になつた。

「愛羅、今日はありがとう。…………ありがとうございます?」

「じゃあ、また明日ね」

蒼井さんと木野山君。木野山君は行つてこのことは普通だけど言い方がうれしい。

「また来てね」

愛羅が手を振ってくれる。ああやつて笑つてると可愛いのに……もつたひない（性格が）

とにかく、結構楽しかった。お菓子もおいしかったし……。

その後、俺たちも解散した。

疲れていたのかその日はぐっすり眠れた。

次の日に恐怖が待つているとは知らずに……

第6話 冬樹達と渡島家（後編）

短くてすこません。
次回もよろしくお願ひします！

第7話 恐怖の強化合宿 前日

その日の朝は、恐怖なんて何もなく普通に登校した。

HRまでは……

「はい、といつことで明日から2泊3日で強化合宿をするぞ~」

『えー』

「塩酸は……そろそろ飽きたから水酸化ナトリウム水溶液にするか『どっちにしても危ないじゃねーかよ!』

夏芽先生とのやり取りは置いといてとにかく、美城高校では毎年強化合宿というものがある。2泊3日の結構大きなイベントだ。そこの場所の観光スポットをめぐったり遊んだりできるが、主に勉強がメインという嬉しくて悲しいものである。

ここにきてはつきり言おう。俺は強化合宿が苦手だ!

勉強が嫌いというのはもちろん、2年生のときの強化合宿で風神が休みだつたためずっと1人でいたことがある。孤独なわけじゃないぞ! 決して孤独では……ない……はず……

まあ、今回は風神もいるし大丈夫だとは思うけどほかのうるさい奴らが問題なんだよな。愛羅とか尾崎君とか木野山君とか……ほかにもいろいろ。

「冬樹。今日はいけそうだから一緒に頑張ろうな」

男なのだが女の子みたいな容姿の風神が話しかけてきた。い……い奴だあ! 可愛いしいい奴。将来いいお嫁さんになれるな!

「じゃあ、HRを終わるぞ」

こいつして朝のHRが終わった。

「明日の合宿楽しみだね」

「合宿ですか……合宿って何ですか?」

「ちょっと瑞希。合宿ぐらいわかってよ！」

野崎さん、蒼井さん、愛羅が話している。なんか微笑ましいな。ああやつているとみんな普通に可愛い女子に見えるな……蒼井さん以外。

それにしても女子って意外にこいついう合宿とかって好きなんだな。愛羅とか苦手そうなのに……。

「冬樹君！ 僕と一緒にハーレム作らない？」

「遠慮します！！」

なぜ俺に話しかけてきたのかは分からないが鶴島君が話しかけてきた。まだハーレムを作る気なのか……超バカだな。

こうなると常識人の縁道寺君と風神ぐらいが頼りだな……野崎さんも一応は常識人だけど藤堂君が絡むと怖いからな。

「冬樹！」俺、明日委員会の仕事が朝からあるから先に行つてもいいか？

「うんいいよ。こつちはないから明日は別々だね」

風神は委員会のため早く行くらしい。じゃあ、明日は1人かなんか寂しいが……まあいつか。

みんなが楽しみにしているが俺は何かが起こりそうな気がして寒気がしてきた……大丈夫なのか？

帰宅

「ただいま～」

家に帰ると誰もいなかつた。父と母はまだ仕事みたいだ。

俺の部屋に戻ると合宿の準備をし始めた。

「ええ～と……着替えと勉強道具とお菓子は1000円以内……つて小学生かよ！」

1人でしゃべっている俺。なんかバカみたいだ……。準備は思つてたよりも早く終わり、10分ぐらいで出来た。意外に荷物は少ないな……。

「あれ？ 風神からメールがきてる」

準備を終えた俺は何気なしにケータイの見ると風神からメールが来ていた。

内容は「貸してた小説を読めてたら返してほしい」という内容だった。

そういうえば小説借りてたな……。今から返しに行くか。

そうして俺は風神の家に向かった。

風神の家

ピンポーン

「は～い……あっ、雪斗！」

「よつ！ 来たぞ」

風神はまだ制服だった。多分着替えるのが面倒くさかつたのだろう。

「これ、小説。ありがとな」

「ごめんな。急に」

「別にいいって、どうせ読みきつてたしな」

よく考えてみれば風神とゆつくり話したのって久しぶりだな……。

最近は周りの奴らがひつむといし……。

「それはそうと雪斗」

「ん？」

「明日から2泊3日よろしくな」

「口うと笑う風神。はつきり言おう、超可憐……！」

「じゃあ、また明日」

「うんばいばい」

ひつじて俺は家に戻った。

「ふつ～」

俺は家に帰るとベットに寝転んだ。

明日から合宿なのだがめちゃくちゃ心配だ。風神は楽しみにしているみたいだけど、俺はいやな予感がしてしおうがない。

絶対にあの中の誰かは問題を起こすに違いない。縁道寺君、野崎さん？、風神以外の人の誰かが……

俺はそんな不安を抱えながら明日を迎えることになる……

第7話 恐怖の強化合宿 前日（後書き）

次回、変人学園の日常「強化合宿一日目！」
よろしくお願いします！

第8話 恐怖の強化合宿 1日目

朝

俺は朝早くに田代を覚めた。当田に遅刻とかそんなベタな事は今はない。

あまりにも心配だったからろくに寝ていない……超寝不足だ。
とりあえずバスで寝ればいいかと思い、俺は朝食を食べて家を出た。

学校に着くともうほとんど来ていた。

「みんな揃つたか~？ もう出発するぞ~」

夏芽先生が呼びかける。きつぎりだったんだな俺……。

「雪斗、おはよう」

紫のショートヘアの美少女（一応男）の市川風神が来た。今日は別々に来たんだよな~。

「ああ、おはよう」

それから俺は出発まで風神といろいろ話していた。あの中では風神が一番だったみたいだ。俺は一番田つて事か……。

「冬樹君、市川君おはよう」

「冬樹と風神、おはよう」

「おはよう、野崎さん、愛羅」

「おはよう」

今度は茶髪セミロング美少女の野口秋葉さんと金髪ロングの碧眼美幼女の渡島愛羅が来た。多分、俺と風神に気がついて来てくれたのだろう。

野口さんは「口」「口」と話しているが愛羅は少し眠たそうだ。きっと俺と同じく寝てないのだろう。理由はよく分からないが……。
しばらくするとほかの人たちも来た。鶴島君は遅れてきて先生に

怒られていた。

「じゃあ、出発だ」

鶴嶋君への説教を終えた夏芽先生が合図をしてバスは出発した。

バス中

バスは広くて少し酔いそうな感じがする。

バスの並び方は、なぜか今くじ引きで決める。夏芽先生曰くしおりに書くのを忘れていたらしい。

俺はくじを引くと右側の後ろから3番目の席になつた。隣は誰になるのだろう……

「私の席はどうですか……あ、ここですか……」

隣は蒼井さんだった。めぢやくぢや心配な人が来たな……。

「よろしくね、蒼井さん」

「よろしくです。冬樹君」

今日は物忘れが少ないみたいだな。うん、よかつたよかつた。

ほかの人たちは、風神と愛羅が隣同士で俺達の席の隣、鶴嶋君と縁道寺君が隣同士で俺達の席の隣、野崎さんと藤堂君と木野山君と尾崎君と夏目先生が一番後ろの席だ。

「ところで冬樹君」

突然蒼井さんが話しかけてくる。

「どうしたの？」

「なぜ愛羅は呼び捨てなのですか？……呼び捨てって何ですか？」

ああ……物忘れが少ないとと思ったのに……。

「何でつて……愛羅が苗字で呼ばれるのが嫌いって言つたからかな」「そうなんですか……じゃあ、私も苗字で呼ばれるのが嫌いです」「はい？」

あの物忘れの激しい蒼井さんがすらすらと言つてこるので少し……

いや、めぢやくぢや驚いた。

「だから、これからは瑞希つて呼んでくれませんか？」

少し照れくさそうにこつこつ蒼井さん。まあ、どうせ愛羅も呼び捨て

だし……

「分かつたよ。よろしくな瑞希」

「よろしくお願ひします冬樹君」

蒼井や……じゃなかつた瑞希はとても嬉しそうだ。よかつたよかつた。

合宿所に到着した。

そこはかなりの山奥で来るまでの道はがたがただった。おかげで風神と愛羅はめちゃくちゃ酔つたらしく顔色が悪い。

「じゃあ、ここからは自由行動だ！ 荷物置いた奴から遊びに行け！ 1時間後の4時には戻れるようしどけよ」

『はーい』

こうしてみんなはあちこちに行つた。

「さてと……俺はどうしようかな~」

合宿所の周りは自然的でのんびりできそうだ。近くに川も流れるし……

ただ、風神と愛羅はテンションが最高に低い。2人ともバス酔いしやすい体质なんだな……『気の毒に……』

『風神……愛羅……大丈夫か？』

『大丈夫じゃない……』

『ですよね~』

とにかく2人は休むということで俺は川の近くで座ることにした。

足を水につけながらボケ〜としている。

周囲からはクラスメイトのはしゃぐ声が聞こえ、その中から「俺はハーレムを作る！」とか「あげぼよ〜」とか「野崎い〜愛してるう〜」とかバカな声が目立つて聞こえる。

なんか暇だな……風神と愛羅は休んでるし、縁道寺君と野崎さん

は見当たらぬし、ほかのバカ共にはついていけない……まじで暇だ。

そうぐだぐだしている内に俺は寝てしまった。

「お~い!
冬樹~!」

目が覚めると田の前に愛羅がいた。

あれ？ 愛羅は又酔い大丈夫なの？」

「は、可言ひにうの、半ばのちうて時間も前の……」

なんぞ俺は2時間も寝ていたのか。そつかせつか、2時間走

え?
2時間?

「あの～。愛羅？」

何
?

一 確か集合にて

「じゅうぶん、田園前か、力丸ね」

「中日の歴史」

1

やほこ」となってしまった。どうやら俺は寝過ごしてしまった

今は5時
せいか集會には1時間も前しやないか！

夏芽先生が怒ると塩酸の毎へ

ない……俺の命日は今日か

「ほら冬樹！ 合宿所に戻るよ。私も一緒に怒られてあげるから！」

「」

もしかして俺を待つていてくれたのかな……そう思えば結構優し

い
な

「早く走れ！」の口り「コンが！」

前回撤回。やつぱ性格悪い。俺はロリコンじやなこー！

といひして初日はぐたぐたの日だった……

第8話 恐怖の強化合宿 1日目（後編）

会話文多くてすこません。

次回予告一

「恐怖の強化合宿 2日目」です。よろしくお願ひしますー。

第9話 恐怖の強化宿 2回目

朝

「ふあ～。眠い……」

俺は口をこすりながらゆっくりと起き上がった。

昨日は、川の近くで2時間も寝てしまつたせいで集合に遅れ、夏芽先生に夜遅くまで説教されていたためかなり寝不足だ。まあ、生きていることだけでも感謝しよう。

「おっ、雪斗おはよう。お前が最後だぞ～」

ふと見ると、風神がいた。もうみんな起きてるのか……

「みんなは？」

「もう食堂に行つたぞ」

食堂……そういえば、もうそんな時間なのか……ここは風神は待つてくれていたのか。優しいな～。

「悪いな風神」

「こいつてことよー」

俺は起き上がりいろいろと準備をし、風神と共に食堂に向かつた。

「あっ、おはよう冬樹君」

「遅かつたですね」

食堂に行くと女子も来ていた。野崎さんと瑞希……あれ?

「愛羅は？」

「ああ、愛羅ならまだ寝てる」

昨日の疲れが出たのだろうか、愛羅はまだ寝てるらしい。まあ、昨日俺と共に怒られてたしな……無理もないか。

「おはよう、冬樹君。今日はいい天気だね」

今日は雨なんだけど……今日も頭が異常な木野山君。俺の周りにはろくな奴がないな。

クラスメイトと話したところ。朝食を食べる」とした。

朝食のメニューは白いご飯に焼き魚、お味噌汁にお茶といつ和風中の和風なご飯。とてもおいしそうだ。

「いただきま……」

「野崎いー！ オッはよおおおお！」

俺がいただきますと言いかけたところに藤堂君が超ハイテンションでこちらへ向かって来る。朝からテンション高いな……うざいな……朝ぐらいおとなしくしとけよ。

「うるさいバカ！ 100回死ね！」

そして容赦なく毒舌発言をする野崎さん。相変わらず怖い……

我が3年5組はやはり朝から騒がしかった

朝ごはんが終わり、愛羅が起きてきたところで勉強会が始まった。教科は自由、まあ、自習みたいなもんかな？

俺は一番苦手な数学をすることにした。一番苦手って言つても全部苦手なんだけどな。

ちなみに席順は、隣が縁道寺君と風神で後ろが尾崎君、前が愛羅だ。ほかの人たちは斜め前とか斜め後ろとかの近いところにいる。まあ、席順自由だしな。

右を見ると縁道寺君が古文をしていて風神が地理をしている。みんな苦手な教科を頑張っているな……

コンツ

突然、何かが頭に当たった。

それを見てみると紙があった。俺はそれを開いて中身を見た。

「昨日夏芽のあほに怒られてたよなー！」

一瞬ぶち切れそうになつたがグッとこらえた。

そつ、それは後ろの席である尾崎君からのメモだったのだ。全く遊ぶんじやねーよ！

後ろを見ると、尾崎君がいかにも返信ちょうどいってつて感じのオ

一ラを出していた。

視線を感じるのも嫌だったので適当に、

「今勉強中だよー。」

そう書いて後ろに送つてやつた。全く面倒くさいな……と、かなり尾崎君とメモのやり取りをしていた。そして知らない間に周りの人全員とやり取りをしていた。縁道寺君はもうあきれた表情を浮かべていた。

ガラッ

誰かが入ってきたので急いでみんなメモを隠した。

「おーい！ みんな。終わる時間だぞー」

入ってきたのが夏芽先生だつた。危なかつた……メモなんか見られたら殺されるぐらいの勢いだしな。

「やつたー！ 終わつたぜえー！」

尾崎君がハイテンションで外に出て行つた。超うひむそこ……

「お疲れ」

縁道寺君が話しかけてくれる。ああ……どこかのうぬそいバカとは違つて優しいな……

2日目は勉強頑張りで終わつた。そして明日、最終日となる……

第9話 恐怖の強化合宿 2日目（後書き）

次回予告 -

次回は「恐怖の強化合宿 最終日」です。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2457y/>

変人学園の日常

2011年12月21日18時50分発行